

創世記27-28章「神の約束を巡る、お家騒動」

1A エサウからイサクへ移る祝福 27

1B イサクの祝福 1-4

2B リベカの対策 5-17

3B ヤコブの実行 18-29

1C 父への偽り 18-25

2C 逆転の祝福 26-29

4B エサウの喪失 30-40

5B ヒッタイト人の妻たち 41-46

2A ヤコブの逃げる旅 28

1B イサクの命令 1-9

1C お嫁さん探し 1-5

2C 無知による努力 6-9

2B ここにおられる神 10-22

1C 天のはしご 10-17

2C 神への誓い 18-22

本文

創世記 27 章を開いてください。私たちはイサクの生涯を見ていっています。その息子エサウとヤコブの間の確執が始まっていたことも見ました。実に、リベカの胎にいる時から、二人はぶつかりあって、出産する時に、なんとヤコブがエサウのかかとをつかんで、出てきました。主が、彼らが生まれる前に語られた通り、弟のほうが強くなり、兄が弟に仕えるということです。

そして、エサウとヤコブが成人してから、その第一歩が始まります。エサウが獵から帰ってきて、非常に腹を空かせていました。ヤコブはちょうど、レンズ豆の煮物を煮ていました。エサウがそれをくれと言います。ヤコブは、長子の権利を売ってくださいと言います。エサウは、なんと、売ってしまいます。彼は、それだけ俗物なのです。神のことなど、全く関係がない。長子の権利という、後の相続に関わることを、今、腹が減っているということで見事に捨てることができるのです。

彼の俗悪さは、結婚した妻にも表れていました。「26:34-35 エサウは四十歳になって、ヒッタイト人ベエリの娘ユディトと、ヒッタイト人エロンの娘バセマテを妻に迎えた。35 彼女たちは、イサクとリベカにとって悩みの種となった。」エサウは、おそらく、ただ自分の肉欲によってこれら女を自分のものにしたのだと思います。神を敬う家庭に、全く度外視している娘たちが入って来た、という状況です。それなのに、イサクがエサウのことを愛していました。彼の獲って来る獲物の肉料理がお

いしかったからです。

1A エサウからイサクへ移る祝福 27

そうした中で、起こったのが、イサクの祝福を巡るお家騒動であります。

1B イサクの祝福 1－4

¹ イサクが年をとり、目がかすんでよく見えなくなったときのことである。彼は上の息子エサウを呼び寄せて、「わが子よ」と言った。すると彼は「はい、ここにおります」と答えた。² イサクは言った。「見なさい。私は年老いて、いつ死ぬか分からない。

イサクが年を取っているとありますが、ある注解書には、それを創世記にある記述から計算したものがありました。この時点で、137 歳だということです。彼の一生は、180 歳(41:6)ですから、結果的には、もっと長く生きたのですが、自分の目がかすんで良く見えなくなっていることから、死期が近いと思ったのでした。そして、「上の息子エサウを呼び寄せて」います。

³ さあ今、おまえの道具の矢筒と弓を取って野に出て行き、私のために獲物をしとめて来てくれな
いか。⁴ そして私のために私の好きなおいしい料理を作り、ここに持って来て、私に食べさせてくれ。
私が死ぬ前に、私自ら、おまえを祝福できるように。」

これは、とんでもないことです。アブラハムの家にとって、最も大きな危機と言っても過言ではありません。アブラハムもイサクも、自分の妻を妹と言ったことも大きな危機ですが、もしかしたら、こちらのほうが大きいでしょう。神のことについては、たった一杯の汁と引き換えに長子の権利を言っているのが、エサウです。そして、自分によって、神を恐れ、信じる子が生まれることなど、何一つ考えていないのが、エサウです。だからヒッタイト人の娘を妻にしています。それを、ただ、自分自身が食べる肉のことで、エサウを選んで、祝福しようとしているのです。

ところで、この「祝福」というのは、正式に、イサクの家のものを息子に受け継がせるという法的な拘束力のあるものです。法的に相続手続きをしているようなものです。

イサクは、主から語られたことは直接、聞いていません。リベカが、主から聞いたことです。それについては、妻からイサクは聞いていたはずですが、けれども、それに逆らうことをイサクが行おうとしています。これが、お家騒動の原因のほとんどだと言ってよいでしょう。家のかしらが、主から聞かないで、主に反することを行えば、家のすべての人々がその影響を被ります。

2B リベカの対策 5－17

⁵ リベカは、イサクがその子エサウに話しているのを聞いていた。それで、エサウが獲物をしとめて

父のところに持って来ようと野に出かけたとき、⁶ リベカは息子のヤコブに言った。「今私は、父上があなたの兄エサウにこう言っておられるのを聞きました。⁷『獲物を捕って来て、私においしい料理を作ってくれ。食べて、死ぬ前に、主の前でおまえを祝福しよう。』⁸ さあ今、子よ、私があなたに命じることを、よく聞きなさい。⁹ さあ、群れのところに行って、そこから最上の子やぎを二匹取って私のところに来なさい。私はそれで、あなたの父上の好きな、おいしい料理を作りましょう。¹⁰ あなたが父上のところに持って行けば、食べて、死ぬ前にあなたを祝福して下さるでしょう。」

リベカは、主から聞いていました。そして、ヤコブを愛していました。彼女には、夫との意見が合わず、一騒動が起こった後で、彼に不満をぶつけています。それが、エサウのヒッタイト人の妻たちのことです。もう嫌になった、と言っています。こうした夫婦の不同意があったのが、リベカが企んだ原因です。

彼女が企んだことは、結果にしか過ぎず、妻が夫から離れて、一致しない行動、独立した行動を取るのには、主にあって夫婦が一つになっていることができていないから、起こっていることです。パウロは、「Ⅰコリ 11:3b **すべての男のかしらはキリストであり、女のかしらは男であり、キリストのかしらは神です。**」女、あるいは妻は、男がしっかりとキリストをかしらとしているからこそ、男をかしらとできるのです。もし、男がキリストをかしらとしていなければ、彼女が彼をいつも、かしらにすることができません。自分自身がキリストをかしらとすることができなくなるからです。

しかし、夫から離れて企んだことは、解決になりません。彼女は自分のしたことの代償を、後で払うことになります。後で説明します。

¹¹ ヤコブは母リベカに言った。「でも、兄さんのエサウは毛深い人なのに、私の肌は滑らかです。

¹² もしかすると父上は私にさわって、私にからかわれたと思うでしょう。私は祝福どころか、のろいをこの身に招くことになります。」

そうですね、エサウの名の意味は、「毛もくじら」です。全身毛の人でした。

¹³ 母は彼に言った。「子よ、あなたへののろいは私の身にあるように。ただ私の言うことをよく聞いて、行って子やぎを取って来なさい。」

リベカは、全責任を自分が取ると言っています。

¹⁴ それでヤコブは行って、取って母のところに持って来た。母は、父の好む、おいしい料理を作った。¹⁵ それからリベカは、家の中で自分の手もとにあった、上の息子エサウの衣を取って来て、それを下の息子ヤコブに着せ、¹⁶ また、子やぎの毛皮を、彼の両腕と、首の滑らかなところに巻き付

けた。¹⁷ そうして、自分が作ったおいしい料理とパンを、息子ヤコブの手に渡した。

ヤコブにイサクが触れた時に、エサウだと勘違いさせるための方策です。

3B ヤコブの実行 18-29

1C 父への偽り 18-25

¹⁸ ヤコブは父のところに行き、「お父さん」と言った。イサクは「おお。おまえはだれかね、わが子よ」と尋ねた。¹⁹ ヤコブは父に、「長男のエサウです。私はお父さんが言われたとおりにしました。どうぞ、起きて座り、私の獲物を召し上がってください。そうして、自ら私を祝福してください」と答えた。²⁰ イサクは、その子に言った。「どうして、こんなに早く見つけることができたのかね、わが子よ。」彼は答えた。「あなたの神、主が私のために、取り計らってくださったのです。」

ヤコブは、ここでどのような心境だったのでしょうか？いくら母からの言いつけだといえ、父に対して、主の名まで使って、騙しています。ヤコブも、代償を払います。確かに、このようにだましたことによって、確かにヤコブが祝福を受けることになります。そして、それは、神のみこころにかなったことです。しかし、それを自分自身の手で獲得しているところで、自分の身に降りかかってきます。主が行われていれば、主が何とかされます。自分が行ってしまえば、自分で何とかしなければいけません。ヤコブは、自分の手を伸ばすことによって、多くの苦勞を強いられるのです。

²¹ そこでイサクはヤコブに言った。「近くに寄ってくれ。わが子よ。おまえが本当にわが子エサウなのかどうか、私はおまえにさわってみたい。」²² ヤコブが父イサクに近寄ると、イサクは彼にさわって、そして言った。「声はヤコブの声だが、手はエサウの手だ。」

今、声を聞いて、ヤコブではないかと感じています。

²³ ヤコブの手が、兄エサウの手のように毛深かったので、イサクには見分けがつかなかった。それでイサクは彼を祝福しようとして、²⁴「本当におまえは、わが子エサウだね」と言った。するとヤコブは答えた。「そうです。」²⁵ そこでイサクは言った。「私のところに持って来なさい。わが子の獲物を食べたい。そうして私自ら、おまえを祝福しよう。」そこでヤコブが持って来ると、イサクはそれを食べた。またぶどう酒を持って来ると、それも飲んだ。

リベカの策略は功を成しました。ヤコブの滑らかな手のところに毛衣を取り付けたので、それでエサウであると信じ始めています。そこで、確かめましたが、ヤコブは再び偽りました。それで、ついにイサクが、その肉を食べました。

2C 逆転の祝福 26-29

²⁶ 父イサクはヤコブに、「近寄って私に口づけしてくれ、わが子よ」と言ったので、²⁷ ヤコブは近づいて、彼に口づけした。イサクはヤコブの衣の香りを嗅ぎ、彼を祝福して言った。「ああ、わが子の香り。主が祝福された野の香りのようだ。²⁸ 神がおまえに 天の露と地の肥沃、豊かな穀物と新しいぶどう酒を 与えてくださるよう。に。²⁹ 諸国の民がおまえに仕え、もろもろの国民がおまえを伏し拝むように。おまえは兄弟たちの主となり、おまえの母の子がおまえを伏し拝むように。おまえを呪う者がのろわれ、おまえを祝福する者が祝福されるように。」

エサウだと思って、この祝福をしています。見て、どうですか？ 確実に、リベカが主から聞いたことと同じように祈っていますが、エサウとヤコブを取り換えていることです。「25:23 二つの国があなたの胎内にあり、二つの国民があなたから分かれ出る。一つの国民は、もう一つの国民より強く、兄が弟に仕える。」というものでした。ところがここでは、弟が、兄に仕えるように祝福しています。したがって、イサクは意図的に、リベカが主に言われたことと正反対のことを行っているのです。これが、非常に深刻、重大なことなのです。しかし、主はこれをものの見事に、ひっくり返されます。

4B エサウの喪失 30-40

³⁰ イサクがヤコブを祝福し終わり、ヤコブが父イサクの前から出て行くとすぐに、兄のエサウが獵から戻って来た。³¹ 彼もまた、おいしい料理を作って、父のところに持って来た。そして父に言った。「お父さん。起きて、息子の獲物を召し上がってください。あなた自ら、私を祝福して下さるために。」

エサウは、祝福を期待しています。しかし、彼が求める祝福は、物質的な豊かさのみで、主ご自身のことは、何も考えていません。ちょうど、実業家クリスチャンの親を持つ息子が、イエス様の子とは全く度外視で、でも、父が死んで入って来る大金の相続を目当てにしている、みたいな構図です。けれども、ヤコブの求めるのは、彼の生涯を見ればわかりますが、主ご自身の祝福、霊的な祝福です。父の持っている、神からの絶大な富、永遠の富に貪欲です。けれども、それを自分でつかみ取ろうとしてしまうところが、彼の弱さです。

エサウがあまりもの俗物で、ヤコブが強烈に、霊的なことを求めている、それなのに、イサクがエサウを愛したということが悲劇です。

³² 父イサクは彼に言った。「だれだね、おまえは。」彼は言った。「私はあなたの子、長男のエサウです。」³³ イサクは激しく身震いして言った。「では、いったい、あれはだれだったのか。獲物をしとめて、私のところに持って来たのは。おまえが来る前に、私はみな食べてしまい、彼を祝福してしまった。彼は必ず祝福されるだろう。」

ここの、「激しく身震いして」というところは、単に彼がヤコブに騙されたということではありません。祝福をエサウに与えるつもりが、ヤコブに行ってしまったことへの衝撃ではありません。なぜなら、ヘブル 11 章 20 節で、イサクが信仰によって祝福したとあるからです。「信仰によって、イサクはやがて起こることについて、ヤコブとエサウを祝福しました。」

つまり、こういうことです。イサクは、意図的にヤコブではなく、エサウを祝福しようとしていました。主が妻リベカに語られたことを無きものにしようとしていました。ところが、見事に、自分がエサウに対して祝福したのが、ヤコブに行ってしまったことを悟りました。自分は主に逆らうことができない、ということの衝撃です。主が、イサクを徹底的に打ちのめしたことに對する、激しい身震いです。イサクの努力を、すべて主はご自分のみこころに用いられたということに對する衝撃です。

このことを悟ったので、彼の信仰がよみがえったのです。つまり、もう主に逆らうことは徒労に終わる。ただ、主のみこころにしたがって、ヤコブを祝福し、エサウには、これから起こることを、そのまま伝えるしかないという、彼の信仰によるあきらめです。それがここの、激しい身震いに表れています。それで、イサクは、「彼は必ず祝福されるだろう」と言いました。

³⁴ エサウは父のことばを聞くと、声の限りに激しく泣き叫び、父に言った。「お父さん、私を祝福してください。私も。」³⁵ 父は言った。「おまえの弟が来て、だましたのだ。そしておまえへの祝福を奪い取ってしまった。」^{36a} エサウは言った。「あいつの名がヤコブというのも、このためか。二度までも私を押しつけて。私の長子の権利を奪い取り、今また、私への祝福を奪い取った。」

ヤコブというのは、かかとをつかむ者という意味合いがあります。押しのける、という意味合いがあります。それで、自分が、腹が減っている時に長子の権利を売りなさいと言ったこと、そして今、騙して祝福を奪い取ったこと、二度までも押しのけたと言っています。

^{36b} また言った。「私のためには、祝福を取っておかれなかったのですか。」³⁷ イサクは答えてエサウに言った。「ああ、私は彼をおまえの主とし、すべての兄弟を彼にしもべとして与えた。また穀物と新しいぶどう酒で彼を養うようにした。わが子よ、おまえのためには、いったい何ができるだろうか。」

そうです、先ほど話しましたように、祝福というのは、当時の法的な相続手続きのようなものです。ですから、それを取り消すことはできません。

³⁸ エサウは父に言った。「お父さん、祝福は一つしかないのですか。お父さん、私を祝福してください。私も。」エサウは声をあげて泣いた。³⁹ 父イサクは彼に答えた。「見よ。おまえの住む所には地の肥沃がなく、上から天の露もない。⁴⁰ おまえは自分の剣によって生き、自分の弟に仕えるこ

とになる。しかし、おまえが奮い立つなら、おまえは自分の首から 彼のくびきを解き捨てるだろう。」

イサクは、信仰をもって預言しました。一つ一つが、後の歴史で成就しています。まず、「地の肥沃がなく、上から天の露もない」とありますが、エドム人が住むところは、セイルと呼ばれるところで、死海の南にある地域です。そこは、はげ山が連なっているところです。次に、「おまえは自分の剣によって生き、自分の弟に仕えることになる」というのは、イスラエルにいつもエドムは敵対します。剣によって生きます。そして、ダビデの時代に屈服して、イスラエル王国に仕えることになります。けれども、「しかし、おまえが奮い立つなら、おまえは自分の首から 彼のくびきを解き捨てるだろう」というのは、イスラエル王国またユダ王国が、主に逆らっている時に、彼らは機会を得て、反抗しています。

ちなみに、その後エドム人は、オバデヤの預言のとおり、セイルから同盟を結んだ者たちによって征服され、追い出されます。ナバタイ人というアラブ系の遊牧民が、彼らの都ボツラ、ギリシア語でペトラに入ってきて、エドム人はだんだんユダの荒野のほうに追いやられます。そして、ユダヤ人のハスモ朝の王、ヨハネ・ヒルカノス一世によって征服され、ユダヤ教に強制改宗させられます。彼らはその時は、イドマヤ人と呼ばれます。そして、イドマヤ人の中から、ヘロデ大王が出てきます。ユダヤ教に改宗していますが、ヘロデ家の俗悪な特徴は残っていますね。しかし、少しずつ同化されていき、エドム人という民族は消滅します。まさに、兄は弟のしもべとなったのです。

ところで、エサウは何度となく祝福を願っていますが、イサクは残っていないと言っています。この出来事についての注釈を、ヘブル書の著者は行っています。「12:16-17 また、だれも、一杯の食物と引き替えに自分の長子の権利を売ったエサウのように、淫らな者、俗悪な者にならないようにしなさい。17 あなたがたが知っているとおり、彼は後になって祝福を受け継ぎたいと思ったのですが、退けられました。涙を流して求めても、彼には悔い改めの機会が残っていませんでした。」

ここで気を付けたいのは、エサウが悔い改めようとしているのに、神はそれをなくしている、ということではないことです。エサウは、自分の淫らさ、俗悪さによって、全く神から離れて生きています。それなのに、祝福はほしいと願っています。このような俗悪さには、悔い改めによって救われるという余地はないのだ、ということです。言い換えれば、悔い改めるつもりが全くない人が、祝福を、涙を流して求めても、絶対にありませんよ、ということです。

主を求めているようでいて、実は全くそうではなく、主ご自身から拒まれている人々は、他にも出てきますね。サウルがそうでした。彼は、主ご自身をその命令を拒んでいるのに、なぜか、祝福だけは求めました。最後、ペリシテ人との戦いでは、霊媒の女によってサムエルを呼び起こしますが、そこでも、サムエルは、彼が退かれていることを宣言します。

そして、イエスが、偽預言者たちに対して言われた時もそうでした。「マタ 7:21-23 わたしに向かって『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。22 その日には多くの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言し、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの奇跡を行ったではありませんか。』23 しかし、わたしはそのとき、彼らにはっきりと言います。『わたしはおまえたちを全く知らない。不法を行う者たち、わたしから離れて行け。』」どんなに、主の名によって奇跡を行ったとしても、みこころを行わなかった者、不法な者は、主が退かれるのです。これが、「悔い改めの機会が残っていませんでした」という意味です。

⁴¹ エサウは、父がヤコブを祝福した祝福のことで、ヤコブを恨んだ。それでエサウは心の中で言った。「父の喪の日も近づいている。そのとき、弟ヤコブを殺してやろう。」

直接的ではないですが、ヘブル書の著者は、心に苦みを持つ人の例としてエサウを挙げています。「ヘブル 12:15 だれも神の恵みから落ちないように、また、苦い根が生え出て悩ませたり、これによって多くの人が汚されたりしないように、気をつけなさい。」そして、先ほど読んだエサウについての話、つまり、「エサウのように、淫らな者、俗悪な者にならないようにしなさい」が続きます。エドム人は、イスラエル人に対して、いつまでもいつまでも、恨みを抱きます。

事あらば、機会を狙ってイスラエル人を攻撃します。イスラエルの祭司たちをサウロが虐殺したことがありますが、それはエドム人ドエグが、告げ口をしたからです。エドム人は、ユダの国がバビロンに倒され、エルサレムが包囲されていた時、そこに立ち寄りましたが、同盟を結んでいたはずなのに、彼らを一切助けませんでした。バビロンに滅ぼされるままにしました。この恨み、赦さない心に対して神のさばきが下ることを、オバデヤが預言しています。また、エゼキエル 35 章でも預言され、裁きが宣言されています。

私たちは、自分の心にある苦みについて、別に他の人々に迷惑をかけていないと自分を偽ります。しかし、ここにあるように、どんなに自分が心を隠していようと、その汚れは多くの人々を悩ませて、汚されていくのです。へりくだって、悔い改める必要があります。

⁴² 上の息子エサウの言ったことがリベカに伝えられると、彼女は人を送り、下の息子ヤコブを呼び寄せて言った。「兄さんのエサウが、あなたを殺して鬱憤を晴らそうとしています。⁴³ さあ今、子よ、私の言うことをよく聞きなさい。すぐに立って、ハランへ、私の兄ラバンのところへ逃げなさい。⁴⁴ 兄さんの憤りが収まるまで、おじラバンのところにしばらくとどまっていなさい。⁴⁵ 兄さんの怒りが収まって、あなたが兄さんにしたことを兄さんが忘れたとき、私は人を送って、あなたをそこから呼び戻しましょう。あなたたち二人を一日のうちに失うことなど、どうして私にできるでしょう。」

再び、リベカが動きました。この 27 章の話は、根っこは、イサクの主に対する反抗があり、リベカが夫に不満を抱いていて、それでそれぞれ偏愛している、エサウとヤコブの間に確執があり、この息子二人にも確執があるという、ほんと、生々しい人間模様、家の中によくありがちな、ばらばらの状態でありました。

今、エサウは長子の権利もなく、祝福もないです。だから、失われた状態です。しかし、ヤコブも今、エサウに殺されて、失われそうになっています。それで彼女はすぐに考えて、ヤコブの避難所として、自分の兄ラバンのところに行くことをヤコブに言いつけたのです。

⁴⁶ リベカはイサクに言った。「私はヒッタイト人の娘たちのことで、生きているのがいやになりました。もしヤコブが、この地の娘たちのうちで、このようなヒッタイト人の娘たちのうちから妻を迎えらしたら、私は何のために生きることになるのでしょうか。」

これだけの騒動になってしまってから、ついに、リベカがイサクに本音を言ったのです。ヒッタイト人の娘について、イサクが何も手を講じていないことに対して、強い不満を持っていました。そして、ヤコブまでが、お嫁さんとしてヒッタイト人の娘からもらったら、私たちは生きている意味がないとまで言っています。

2A ヤコブの逃げる旅 28

そこで、イサクは、自分自身のことにおそらく気づいていると思います。これから、ヤコブが妻の兄、ラバンのところに行くけれども、そこで息子ヤコブもお嫁さんを見つける、ということです。

1B イサクの命令 1-9

1C お嫁さん探し 1-5

¹ イサクはヤコブを呼び寄せ、彼を祝福し、そして彼に命じた。「カナン地の娘たちの中から妻を迎えてはならない。² さあ立って、パダン・アラムの、おまえの母の父ベトエル家に行き、そこで母の兄ラバンの娘たちの中から妻を迎えなさい。

父アブラハムが、自分のお嫁さんのことで、周囲の娘たち、カナン地の娘たちの中から妻を迎えてはならないと、自分のしもべに厳しく誓わせましたね。それを、エサウの妻たちのことから悩んでいた二人は、痛いほど教訓を味わったのです。それで、ヤコブ自身も同じようにしなさいと祝福して、命じました。

³ 全能の神がおまえを祝福し、多くの子を与え、おまえを増やしてくださるように。そして、おまえが多くの民の群れとなるように。⁴ 神はアブラハムの祝福をおまえに、すなわち、おまえと、おまえとともにいるおまえの子孫に与え、神がアブラハムに下さった地、おまえが今寄留しているこの地を継

がせてくださるように。」

すばらしいですね、アブラハムに現れた神が、ヤコブを祝福するようにという祈りです。全能の神として、神はアブラハムに現れましたが、同じ全能の神です。そして、今は、独身のヤコブですが、これから得る妻によって、多くの子が与えられ、増えるようにと祝福しています。それから、アブラハムへの約束を、イサクを通して、息子ヤコブに受け継がれるようにという祈りです。ヤコブ自身にも、そして彼の子孫にも、です。この子孫からキリストが現れます。そして、アブラハムに下さったこの地、寄留している地を受け継ぐようにという、土地所有の祝福もしています。

⁵ こうしてイサクはヤコブを送り出した。彼はパダン・アラムの、ラバンのところに行った。ヤコブとエサウの母リベカの兄、アラム人ベトエルの子ラバンのところである。

ヤコブは、エサウから逃げてはいるものの、イサクはそれを、正式に父から子に、お嫁さん探しで遣わす祝福式にしました。

2C 無知による努力 6-9

⁶ エサウは、イサクがヤコブを祝福したこと、またパダン・アラムから妻を迎えるために彼を送り出したことを知った。イサクが、ヤコブを祝福して送り出したときに、カナン of 娘たちから妻を迎えてはならないと命じ、⁷ ヤコブが、父と母の言うことに聞き従って、パダン・アラムへ行ったことも。⁸ さらにエサウは、カナン of 娘たちを、父イサクが気に入っていないことを知った。

エサウは、ここで家の中で何が起こったか、その全容を知りました。つまり、自分の妻たちが父に気に入ってもらえなかったのだと。だから、弟ヤコブは、母リベカの親戚のところに行って、嫁探しをするのだと。それでエサウの取った行動が滑稽です。

⁹ それでエサウはイシュマエルのところに行き、今いる妻たちのほかに、アブラハムの子イシュマエルの娘で、ネバヨテの妹マハラテを妻として迎えた。

よりによってイシュマエルです。エサウは考えました。同じ親戚だから、ということです。確かに、イシュマエルは、主の御名を知っている人でした。けれども決定的に違うのは、イシュマエルも、アブラハムの家から追い出されて、いっしょに受け継いではいけないとされた人です。兄弟に敵対して生きるとされていた人、またその子孫です。

分かりやすく話すならば、これまでお守りや数珠や、神社や寺のものを嫁たちが家に持ち込んで、クリスチャンの親が困って悩んでいたけれども、今度は、同じ唯一神を信じているからといって、イスラム教徒の女と結婚した、みたいな構図です。まったく神のこと、霊的なことが分からないので、

彼は、自分の考えられる人間的なことにしたがって、対処したのです。

2B ここにおられる神 10-22

1C 天のはしご 10-17

¹⁰ ヤコブはベエル・シェバを出て、ハランへと向かった。

ベエル・シェバは、アブラハムにとっても、イサクにとっても大事な霊的な拠点です。26章で、ペリシテ人たちと井戸について、争いがあり、それでも掘りつづけて、ついにペリシテのアビメレクと平和協定を結ぶことができました。そして改めて掘った井戸から水が出てきました。誓いの井戸という意味の、ベエル・シェバです。そこから、かつてアブラハムが父の意向により滞り、父が死んでから旅立ったハランへ向かいます。そのまま兄弟ナホルの親戚は、留まっていました。

¹¹ 彼はある場所にたどり着き、そこで一夜を明かすことにした。ちょうど日が沈んだからである。彼はその場所で石を取って枕にし、その場所で横になった。

グーグルマップで測ると、ベエル・シェバからベテルまでは、114 ㎞でした。かなりの距離です。そして、ベテルですが、午前礼拝で話しましたように、今は、ユダヤ人居留地の中にあります。ユダヤ人たちなので、ちゃんと標識も付けて、囲いも付けていますが、それでも他の遺跡に比べると、あまりにも質素で、簡素な場所でした。平らな裸岩が見え隠れしているだけです。



しかし、そこに主がおられるとは、知らなかったと！ヤコブは後で感嘆します。しかも、ヤコブはたった独りで旅をしています。その寂しさがあります。彼は基本、天幕にいる人間であり、羊飼いとして出て行っても、すぐに戻って来る生活をしていたはずで、そして、何よりも兄エサウから命を狙われています。この不安は非常に大きいのです。後に、ヤコブが戻ってくる時にエサウがやってきていると聞いて、彼の不安と混乱はかなり大きいものでした。そして、これからお嫁さんを自分独りで捜さないといけません。イサクは、アブラハムのしもべが捜しに行きましたが、自分独りですべて、それを行わないといけないのです。そして、たった一本の杖で旅をしています。

皆さんの中にも、そういった不安、過去の出来事が重荷になっている人がいるかもしれません。将来に向けての不安がある人がいるかもしれません。たった独りになってしまっている人。または、本当に自分が必要なものさえ持っていないような状態にあるかもしれません。そういった時にこそ、実は、その只中に主がおられるのです。それで、これまでにない主のご臨在を知る恵みにあずかることができるかもしれません。

¹² すると彼は夢を見た。見よ、一つのはしごが地に立てられていた。その上の端は天に届き、見よ、神の使いたちが、そのはしごを上り下りしていた。¹³ そして、見よ、主がその上に立って、こう言われた。「わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。わたしは、あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。¹⁴ あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西へ、東へ、北へ、南へと広がり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。

私は、信仰をもって間もなくしてここを読み、涙して読むことはできませんでした。なぜなら、ヤコブが、その人生の中で、もっともずっとつけた時に、これまでにない祝福の約束を確認してくださったからです。生まれる前から、アブラハムへの約束、そしてイサクに受け継がれた約束が、自分に受け継がれることを告げられていたヤコブです。それを、全く関心のない兄エサウから長子の権利を奪うという形で、成し遂げました。そして、父イサクまでがエサウに祝福しようとしたのを、偽って、自分自身が受けました。それで今、急いで、兄から命を狙われ、たった独りでお嫁さん探しをしています。これほど惨めなことはないでしょう。しかし、そのように打ちひしがれている時にこそ、彼が神の恵みに触れることのできる、絶好の機会です。

思えば、低められる時に、高められます。主イエスが言われた通りです。ネブカドネザルも、自分が野の獣のようになり、理性が取られてから、それでようやく、いと高き神を知ることができました。弟子たちは、イエスを見捨てて、それからユダヤ人たちを脅えて戸を閉めている時に、その只中に、よみがえられたイエスが現れ、「平安があるように」と言ってくださいました。パウロは、その宣教において、最も暗い時、つまり、激しい反対を受けたコリントにおいて、またエルサレムでユダヤ人たちから殺されかけた時、その夜に、主がそばにいて、「恐れてはならない」と言ってくださいました。

すべて、自分が最も深い谷にいるような時に、主が共におられて、それがかけがえのない出会いになっているのです。「たとえ、死の陰の谷を歩むとしても、私はわざわざいを恐れません。あなたが、ともにおられますから。(詩 23:4)」

そして午前礼拝でお話したように、イエスは、弟子ナタナエルに対して、ご自身がこの天のはしごであることを語られました。(ヨハネ 1:51) 地上にいる私たちと、天におられるいと高き方とをつなぐはしごは、神であり、人であられるイエス・キリストです。この地上で、私たちの負い目のある地上での日常生活で、主は、天の神の栄光を、その恵みとまことの栄光を現わしてくださいます。

¹⁵ 見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」

主は、アブラハムへの約束がヤコブのものになることを伝えられた後、これからの旅が守られることを伝えてくださいました。そこで最も大事な約束は、「わたしはあなたとともにいて」であります。今、エサウから逃げているヤコブですが、ここで主は、これをご自身が共にいる旅にしてくださいました。主が、ご自分のみこころを行う旅にくださっています。ここから出て行って、またここに戻って来る、宣教の旅のようにしてくださいます。イエスが、弟子たちに、大宣教命令を出した時も、同じ約束でしたね。「見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。(マタイ 28:20)」そして、共にいるので、ご自身が約束されたことを成し遂げるまで、見捨てないのです。

¹⁶ ヤコブは眠りから覚めて、言った。「まことに主はこの場所におられる。それなのに、私はそれを知らなかった。」¹⁷ 彼は恐れて言った。「この場所は、なんと恐れ多いところだろう。ここは神の家にほかならない。ここは天の門だ。」

そうです、ここが神の家であり、天の門であるのに、ヤコブが気づきませんでした。私たちもヤコブと同じように、「ここは主がおられるけれども、こういったところにはおられない」と心の中で、どうしても思ってしまう。自分自身でも見たくない、谷底のような経験です。調子のよい時は、主がここにおられると思いますが、同じように調子の悪い時にもおられると、なかなか信じにくいです。けれども、それでも主がおられるのです。神は恵み深い方なのです。

そして、こんな何の変哲もないところ、ここがあまりにも畏れ多いと彼はみなしました。それで次の行動に出ます。

2C 神への誓い 18-22

¹⁸ 翌朝早く、ヤコブは自分が枕にした石を取り、それを立てて石の柱とし、柱の頭に油を注いだ。

油注ぎは、主がここを聖別されていることを示している行為です。ここは、主ご自身に属するところであるということです。それを自分が一晩付き合った石をもって表しました。

¹⁹ そしてその場所の名をベテルと呼んだ。その町の名は、もともとはルズであった。

ベトが「家」で、エルが「神」という意味です。それで神の家となります。

²⁰ ヤコブは誓願を立てた。「神が私とともにおられて、私が行くこの旅路を守り、食べるパンと着る衣を下さり、²¹ 無事に父の家に帰らせてくださるなら、主は私の神となり、²² 石の柱として立てたこの石は神の家となります。私は、すべてあなたが私に下さる物の十分の一を必ずあなたに献げます。」

ここで 21 節にある、「帰らせてくださるなら」は、「帰らせてくださるので」というような意味合いになっています。つまり、主が必ず約束を果たしてくださるので、確かに主は私の神となり、ここが神の家となり、それですべての十分の一を献げますと誓っています。かつてアブラハムが、メルキゼデクに十分の一を献げたように、神にここで礼拝を献げるということです。

つまり、主の示された大いなる約束に対して、感動して、確かにこの神のご計画に私自身は献げていきます、ということです。しっかりと、主が約束を守っておられることを確認しつつ、旅先でも主を覚えます。そして、確かに守られたことを知り、主を礼拝しますということです。これまでの信仰の人々が、これでした。ノアが洪水の後、全焼のいけにえを献げました。アブラハムがカナン之地に到着して、主が現れてくださった後、祭壇を築き、いけにえを献げました。主の恵みに、心一杯、応答するのです。これが、主に献げるということです。主の恵みの計画に、自分自身を明け渡すことです。